

# tab

No.  
9  
2008  
/03  
/15

後藤美和子 / 木村和史 / 石川和広  
高野五韻 / 野村龍 / 鈴川夕伽莉  
長尾高弘 / 近藤弘文 / 倉田良成

特 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 近藤弘文：蜜蜂／01  
後藤美和子：ダンス／02  
長尾高弘：謝る人・空室／04  
高野五韻：声と街路／06  
石川和広：ビュー・はじまりの焦慮／07  
野村龍：桃・Kiss／11  
倉田良成：とまをあらみ・雲のかよひ路／13

文

- 鈴川夕伽莉：菜の花／16  
倉田良成：音楽の歎び／19  
木村和史：少女／21

あとがき集／23

画：和田彰

tab 第9号／2008年3月15日(毎奇数月発行)

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／[kateis11@k3.dion.ne.jp](mailto:kateis11@k3.dion.ne.jp)

off dem ich sie sind nur  
ausgeglichen

off dem ich sie sind nur  
ausgeglichen

Handwritten text on the right edge of the page.



蜜蜂

だから言語的鉱物も

飴玉のように胃を照らすことはなく

青空は幽霊の噂が絶えない

あなたという装置

なけなしの万年雪としてたった一行です

誰もいない蜜蜂

って知ってますか

木の真下から空を見上げて

小声が落ちているのは

折り込まれた光のひたいに、である

じっと動かずに動かない

ぶつける木の実をさがしています

遠くから字を書くよ

を撫ぜるのはきつとわたしで

誰かが煉瓦を割っている

のもきつとわたしで

たった一行の

光をぬけていった蜜蜂は

ひとはみない瞳

そんな死体ごっこ

後藤美和子

## ダンス

有している

山を

垣根を越えて

今か今かと待っている

飛んでくる

幸いの水に

円を作り

くるくると踊っていた

目を掲げて窓の外に

一つの水平をみとめ

口も手も頭も

開けてゆく

絡まるものがある

それは指だ、何本もの

腕を掴む指もある

私たちの手は長く

干し竿よりもずっと遠く

植栽を超えてゆく

そして水際に至る

泥に始まり

爪を染め

指紋をふさいでゆく

波の形をした多指の手に  
先陣なき踊り

「皆既蝕」四〇号

長尾高弘

## 謝る人

テレビで食中毒のニュースを見ていたら、  
知っている顔がアップで出てきた。  
何十年も会っていないけれども、  
あれは元同級生。  
若いときの印象とは、  
随分かけ離れていたが間違いない。  
おかげで、  
普通なら消費者の立場で考えるべきニュースが、  
逆立ちしてしまった。  
もっとも、  
自分には謝る相手もないけれど。

## 空室

信号で右に曲がると、  
急に人氣がなくなった。  
土ぼこりの舞う、  
殺風景な坂道を、  
上っていった。  
アパートの階段も、  
上っていった。  
ドアを開けると、  
部屋には誰もいなかった。

ああ、やっぱりいなかったか。

反対側の窓の向こうに、  
墓地が見えた。

誰にも会わなかったのに、  
その晩風邪を引いた。

楽しく読んだ本を図書館に返すので、思い出に気に入ったところを引用  
しておこうと思ったのだが、あったはずの箇所がどうしても見つからな  
いので、記憶の中から引用した。本を返したら私も風邪を引いた。

## 声と街路

晩冬の低い陽がよくまわり

誰もが影を薄くしていた午後

若者はやってきた

足を引きずりながら

傾いた口角から声を垂らしながら

舗道をやってきた

一つらなりの

ことばではない声が

道を濡らしていき

飛沫を避けるかのように

人々は小さく斜めになった

(声に照らされるようにして 長く濃い影になった)

ことばではない声／粗く湿ったみえない物質

茸を生やした虫のように声を生やした生き物であるあなたよ

わたしは舌を上下して風を呼ぼう

声のまわりを渡り 虹色の雲を吹き上げる風を

舗道に一本の声が据えられた

(はじまりもおわりもない 一つの国が据えられた)

石川和広

ビューー

さみしいといおうとして

がんばります

それではあんまり貧乏なところもち  
でしたので

湯をわかして風呂へ入る頃

裏のといがかちんかちん云っている

汗をふく

とうがらしを炒めて

刻んだものを入れて

時計を見る

そこには柱があつて

釘の跡があつて

柱がいくつかの顔を持っているのだった

実際壁掛けの時計はない

手にはめた時計の数字だけ

それだけが浮かんで

テレビをつけないので

腕時計をみている

柱になぜカレンダーをかけたくなるのだろうか

それはあまりにもそのとおりで

押しピンの跡があるんだな

なんで押しピンが引き出しにいっぱいあったのかな

もうそんなことはしていない

押し固めることはできず

あきらめた感じで

置いていく

雲について考えた

想像した

雲と季節は実はというほどのものでもないが

ずれているんだと思う

黄金に雲が照り映えても

感心しない時は全然

空は見ないときが多い

見れば見たで

いいときがある

空も建物もほとんど黒で

雲だけが

複雑な赤の残りだけを

見ているような

そんな瞳の中のいくつかの血管の走りを不意に拡大  
したような

見ているだけで

それが本当のことを写している眼のような雲

だとしたら

それは誰の目だろう

俺かな

ウサギかな

## はじまりの焦慮

空が恐ろしいたくらみの心の住処であったので

人間は空には住めなくなって

やっと地上におりてきた

人間の心は空に置き忘れたままだった

娘は人間の心がないやさしい人間に育てられたので

空つまりたくらみの心は知らず

ただ雨にふられ

風をよるこんでいた

部屋の中であたたかい紅茶を飲みながら

食器棚がどうしようもなく死んでいる

朝のヒタキの声を聴いた

ある日海に行って

浜辺で焚き火をして

星を見ながら友達と話をして

ぐでんぐでんに酔ってテトラポットを登っている

幼いのに酔ってしまったことが

優しい召使や立派なピアノの先生との大きなちがいになった

なにがちがうのだろうか

そしたら

びゅうびゅうびゅうびゅうと呼んでいる風が

凄い速度で雲を押し流して

金や緑や赤や紫の

光を引き出した

柄のない大鍋のような朝がきはじめている

友達はせきをしたりあくびをしたり

帰り支度をはじめたが

娘はもつと見ていたいと思った

思ったらその「思った」が

ふるえを呼び喉元から込みあげてきて

空に帰らなければという次の焦りを導いた

野村龍

桃

輝きが振り向くと

燕達の虹の翼が

空にうつすらと最後の歌を翳している

聳え立つ秋の香りの彼方を

独りの懐かしい眩きがひっそりと歩いて行く

篝火草は

次第にほの暗くなる乾いた写真のなかで

濡れた光を高々と掲げる

誰かが忘れていった浅葱色の風から

睡っていた御使い達が次々と飛び立つ

砂で出来た金色の城の中で

今日も青髭公の狂った夕餉が始まる

捧げられる静かな祈り

魂の果てに見えるという俯いた葉脈

その少し先で

暖かな神が

無数の言葉に包まれてまどろんでいる

青髭公から

分厚い手紙が届いていることなどすっかり忘れて

## kiss

あまいキス

あたたかなキス

あなたを

訪れるための

静かなノック

## とまをあらみ

題しらず

秋の田のかりほの庵のとまをあらみわがころもでは露にぬれつゝ

伝天智天皇御製

己がれがここに来てどれくらいになるか、ちょっと見当がつかない。川が流れるここは、見渡すかぎりの蘆原としか人は思わないだろう。けれどこんなところでも暮らしはあり、時は刻まれ、青空を行く雲を見上げることだってある。仲間には小さな畑をひらいてネギをつくり、ねこを飼っているやつもいるんだ。水は河川敷のグラウンドとか小公園の水飲み場や、併設されている公衆トイレから汲み、人目につかないところで身体だって洗うんだぜ。こういう渡世で身体が臭って、シヤバの人間から忌まれたりしたらおおごとだ。ときどき街に食い物を調達しに行く己たちは、蘆原にさえいられなくなる。街にいられないからここにいるのに。己の仲間にはいろんなやつがいるけれど、同じ数だけのいろんな過去があり、そのいろんな過去は己に言わせればお定まりの、みんな似たような色をしている。聞いてもわかりきったことだから聞かないし、言っても何をどうすることもできないので言わない。それだけだ。ときどき冷たくなった軀を担架に載せられて、青シートの小屋から肅々と運び出されてゆく者もいる。己たちにとってもっとも怖ろしい、危険な季節は夏だ。どこにも居場所のない若いやつらが、世界の端っこでようやく危うい居場所を得ている己たちをこの世界から追い落とそうと、夜、

大挙してやって来るのだ。やつらは彩り鋭く大きな花火を揚げ、夜の光にきらめくチェーンや鉄パイプを六波羅武者のようには華麗にたばさみ、熱帯に棲む原色の鳥に似た咲笑の大声をたてながら、まるで酔ったように、頬紅を刷いたように上気して、己たちを凹凸のない一個の赤く濡れた肉塊という存在になるまで、ていねいに叩きこんでゆく。そして己たちの小屋には火が放たれる！ 転がされ、針金で荒く縛られたまま、焚き木のように燃やされる、しかし己は王。この世界の旱天に雨を呼ぶため、高貴な犠牲として献げられる、己は王。この世は燃えがらとなった己の治世だ。

## 雲のかよひ路

五節ごせちの舞姫を見てよめる

あまつ風雲のかよひ路ふかき吹とちよ乙女のすがたしばしとどめん

僧正遍昭

涅槃のような金色の絶対的なねむりからひき戻されて、目がさめると十二畳ほどのがらんとした和室のかたすみにいた。そのとき二、三人の男が同室していたけれど、こちらのほうには完全に無視している。中年の女性が入室して、枕元まで来たのを見ると、それが看護婦であるとわかった。それから数刻のうちに順を追ひ、ここが精神病院である事実が段々と判明してきたのだけれど、それは誰もが日常でふつうにおこなっていることを次々に禁じられる、という儀式を通してのことだった。私はある種の混乱と昏睡のすえにここにやってきたのだ。施設は男性病棟と女性病棟とに分かれていて、その二つの部分の住人が中央のダイニングで出会って、作業をしたり会話したりするようになっていく。そこで私はおもに若

い女性患者から、頻繁にたばこをねだられた。その結果におよその見当がついていたので、どんな場合でも一本もやったりしたことはなかった。それでも次から次へと無心された。あるときはそのなかのひとりが私のために、ガールフレンドでも紹介するように彼女の友だちや別の友だちを連れてくることもあった。拒食症の少女がエンピツのようにほそい腕を組んで歩きまわりながら、この病院にいたる身の上話をした挙句に上目遣いにこちらを見、一本のたばこのために私を誘惑することさえあった。何度ことわっても同じことだった。これではたばこをやってもやらなくても大したちがいはないのではないかと思うことさえあったが、その一本を誰かひとりにやるだけでもう元には戻れない、インフェルノの業火を頬に感じた。これが病氣ということなのだ。彼女らのなかには、恐ろしいほどの美人なのだが、永遠の責め苦を受けている能面「瘦男」みたいな眉根で、小川から揚がったなきがらの冷気を感じさせる女もいて、たまはがねの硬度の沈黙を守っている。ある運動の時間に、晴れた空のしたのグラウンドにみんなといっしょにしゃがんで運動療法士の説明を受けていたとき、彼女がとなりになっていた私に聞こえるように「ホラ、チョウチョ」とつぶやいたのは、私だけが幻聴した夢のような世に属することがらだったのか。会議室の窓にもたれ、いつも外をながめるのがならいだった別のむすめは、冬が終わわり、世界中が紅潮したような水気に充ちたうるわしい三月の午後、絹を裂くみたいな叫び声をたてつづけにあげて職員に連れてゆかれた。あれは欲びでもなく、悲哀でもない。たぶんこの世とは異なる世界からの呼びかけを、翻訳することもせずそのままつたえたものだった。別の世に属するひとびとにとって、この世でのわが身のことなど、どうでもよいことではないか。彼女らはいずれ、ほの蒼いオリエムポスに帰るのだ。

## 菜の花

花屋さんには、花を好きな人がなるのが良い。あたりまえかもしれないが、「この花が好きです」と話してお客の心を和ませられる人なら良い。

京都市庁舎にほど近いホテルの一角。誰か知らない披露宴へ向かう行列を尻目に花屋のドアをくぐった。お客は私ひとり。千円くらいで小さな花束を、と店主に申し出れば、当然その用途を尋ねられた。私は遠慮がちに、お墓参りに行くことを伝えた。

少しもおめでたくない花の用途にも、店主は快く応じた。白い花をベースに、でも明るい色も欲しかった。だって友達のお墓参りだから。ガラスケースのとりどりの花の中に、派手過ぎない黄色い花を見つけた。菜の花だ。いちおう菊も見つけたが、断然、菜の花の方が素敵だ。

まだ一月だというのに、花屋にはもう春の花がある。店主は慣れた手つきで花を括りながら、菜の花は私も好きなんですと話した。安くても可愛くて、葉っぱが沢山あるのも綺麗でしょう、と。

平成九年四月、とある国立大学医学部、入学式のキャンパスで私とSちゃんは出会った。十八歳。ふたりとも菜の花の季節、三月の早生まれで誕生日も四日しか違わなかった。三月生まれは年度の最後に年を取る。Sちゃんは学年で一番年若く、次が私だった。

私たちの大学の医学部には、一旦他の学部を修了したり就職を経験したのち、改めて医学を志し入学してきた人も多かった。私たちを含む高校からの入学者は、世間知らずのひよっ子として、様々な意味で可愛がられた。

ところで私が医師を志したのは、高校生活

も中盤を過ぎた頃だった。足りない成績を補うため、頭がおかしくなるほど受験勉強に没頭した。反動で肝心の大学で一旦燃え尽き、低空飛行を続ける破目になった。一方のSちゃんは、もつと幼い頃に医学を志したという。純粋な向学心は大学に於いても真っ直ぐ伸び続けた。私は、本当はそんな彼女に嫉妬した。と同時に、口には出さないが、真っ直ぐすぎて折れてしまうのではないかと心配した。生き急ぐように見えることもあったが、傍目には私だって同じだったのかもしれない。

私はギリギリ、Sちゃんはおそらく余裕の成績で医師国家試験をパスした。私は京都の病院で小児科医師になった。Sちゃんは卒業校の大学病院に残り、外科系の医師になった。お互い多忙を極め、ほとんど連絡は取らず、年賀状程度の付き合いとなった。

国が所謂「新研修医制度」を導入する直前、旧制度最後の年に研修医となった私たちは、おそらく他の世代にはない理不尽を味わった。私は日々追い詰められ疲弊し、しばしば心が「死にたい」と呟いた。一度医師になつてしまえば、それ以外の仕事に就くことは不可能に思えた。生きていくにはこの道しかないと思うほど、逃げ場を失った。患者さんらに対する責任感、ただそれだけで一日また一日と生き長らえていた。

同じ頃、遠い地でSちゃんは過労に倒れていた。しかし闘病生活すら、彼女特有の強固な使命感に縁取られていたに違いない。可能な限り出勤しつつの闘病であったと聞く。その果てに、不慮の事故で帰らぬ人となった。平成十七年二月、あと少して研修医生活も終わり、新天地へ踏み出そうとする志半ばであった。

大雪の中、特急で駆けつけた彼女の通夜、私は初めて彼女の御両親と顔を合わせた。傍で生前のSちゃんの親友・Nちゃんが、私を御両親に紹介した。するとお母様が優しく目を細め「ああ、あなたが『ゆかりちゃん』ですか」と仰った。お母様のこの表情に「Sちゃんにとつての私」を見て取り、切なかった。棺の中の彼女は白粉をしていた。彼女は普段化粧なんてしない人だった。だから私はそれが彼女だと信じられなかった。彼女の死が理解できず、到底冥福など祈れる心境でなかった。

この時には、はっきりした死因は伝えられなかった。私は彼女の「過労」というバックグラウンドから最悪の死因をも想像した。怖くて誰にも尋ねられなかった。どうして彼女が死んで自分が生きているのか、だんだん分からなくなった。

研修医生活が終わっても、Sちゃんの記憶は固化したままだった。Sちゃん何故死んだ？何が苦しかった？私は彼女の返答が、どこから降ってくるのを待っていた。

のちの職場で知り合った同世代の医師が、Sちゃんの高校時代の友人であった。Sちゃんの死後、彼女らの高校の恩師は「君たちは死んではならない、頑張り過ぎてはならない」と語ったという。その通りだ。私たちが過労で死なないためには、「頑張り過ぎない」ような気を付けるしかない。

しかしこの国の医療は、個々の医師たちが「頑張り過ぎること」を止めれば即座に崩壊する。私が経験したのは小児救急の現場だが、ごく当たり前に週百二十時間以上勤務し、しばしば「自分の判断ミスで目の前の患者の命を危険に曝すか、それとも自分が過労で命を落とすか」というデスマッチな感覚を覚えた。他にどれほど多くの医師が同じ境遇に置かれているだろう。国はこの状況を認識していない。意図的に無視しているのかと勘ぐりたくなるほどのあんぼんだのである。

この国の医療システムは、使命感の強い人間から順に喰い潰す。いつそ国を挙げ、過労に対する葛藤が皆無の「家畜人ヤプー」みたいな医師の養成に乗り出したらどうか。もつとも葛藤のない医療人に、人間らしい倫理観など望むべくもないが。

平成十九年の暮れ、私の実家に覚えのない冊子小包が届いた。Sちゃんの御両親からだった。平成二十年の正月に一泊だけ帰省した際、その包を開いた。

写真集が出てきた。一目見るなり涙が溢れて止まらなくなった。御両親がSちゃんの思い出を綴った写真集だった。見返しに短い手紙が添えられていた。彼女の二十六年の生涯を風化させまいとする願いが込められていた。一頁一頁に愛情が溢れて、私はただ泣きながら頁を繰るしかなかった。私は自分の家族の前で声を上げて泣いた。

写真のほか、数点の絵と詩がおさめられていた。絵に関しては、私は最初プロによるものだと思ったが、実はSちゃん本人の作であった。驚いた。彼女にはこんな才もあったのだ。多くは病床における作品と聞いたが、生前の彼女と絵について語れなかったことを悔やんだ。それから彼女の詩。強い感受性で以って自己の内面と向き合い、厳しい現実に対してせんとする姿が浮き彫りになっていた。

私は彼女の「生きる意志」を、それら作品の中に確認した。それは「啓示」と呼んで差し支えなく、また、あたかも植物の種子の如く、私の心の脆弱な凍土にばら撒かれた。

死の直前まで真つ直ぐに生きようとした彼女の意思が私に突き刺さり、固くて丈夫な根を張りめぐらせた。

写真集を読んですぐ、彼女の御両親に御礼の手紙を書いた。と、すぐに返書が届いた。そこにはSちゃんのお墓が、御家族に縁の深い京都のある寺院にあること、また偶然にも彼女の親友・Nちゃんが、現在京都市内の病院に勤務していることも書かれていた。

私はNちゃんに連絡を取り、お墓参りに連

れて行ってもらうことにした。

Sちゃんが一番好きだった花は、向日葵。彼女はただ好きだけでなく、時にはうなだれたり枯れたりする、向日葵の暗い横顔からも目を逸らさなかった。そして精一杯に太陽を追いかける、黄色い光を放つ花を愛し、憧れた。

一月は向日葵には早い。だけど向日葵に負けない明るい花をあげよう、Sちゃん。あの写真集には、満開の菜の花畑で愛犬と微笑むあなたの姿もあった。菜の花は肌寒い季節にやわらかく葉を広げ、可憐な黄色と濃密な香りが私たちを微笑ませる。Sちゃんの硬質な使命感の裏には、音楽を愛するやわらかい心があった。あなたはフルートやピアノの演奏に長け、私は隣で歌ってばかりいた。それからあなたにも私にも、恋に恋して深く傷つくような、ナイーヴな心があった。私とあなたが一番の共通点は「傷つき易さ」だったように思う。あなたと過ごしたひとときは菜の花に似ていた。だから、この花をあげよう。

花屋にて、店主は手際よく花を束ねていく。すらりとした白い花に黄色い菜の花、それに淡いオレンジのカーネーションを加え、シンプルなブーケが出来上がった。「寒いですからお気をつけて」という店主の笑顔に見送られ店を出た。

Nちゃんとの待ち合わせは、京都市営地下鉄東西線の某駅。久しぶりに会う彼女もブーケを持っていった。かすみ草と、黄色と桃色のチューリップだった。

閑散とした冬の町を歩いた。Nちゃんはこれまで、折に触れてSちゃんの御両親の心を慰めてきたようだった。彼女の中でSちゃんの「死後」という時間は、私のそれとは異なる流れ方をしていった。親友であっても、いや親友だからこそ「生前何かもつとしてあげられたことはなかったか、話を聞いてあげられなかったか」という気持ちは強いようだった。

しかし、それを大仰に語ることはなかった。あの写真集が完成した時、Sちゃんの御両親から「Sの友達にも届けたいのだが、誰に贈るのが良いか」と相談を受けたのもNちゃんだった。彼女は戸惑いながら数名を推したそうだった。私は光栄にもその一員に含まれた。Nちゃんにお礼と、素晴らしい写真集であった旨を伝えると、「ゆかりちゃんはそう言ってくれると思った」と言ってくれた。

Sちゃんの死因についても、詳しく教えてもらった。やはり不慮の事故としか言いようのないものだったが、過労さえなければそんな不幸も起こらなかっただろう。

寒い日だった。小さな寺院に到着する頃には、雪がちらついていた。いかにも寂しい墓地だったが、Sちゃんと、彼女の御祖父様の眠るお墓だけは沢山の花で飾られ、目立っていた。「今朝Sちゃんのお母さんから電話があった、古い花は捨てていいって仰ったんだけど：ぜんぜん古くないやん、ねえ、これ：」Nちゃんが呟く。真っ赤な南天と松葉と小菊の束。ところでこの中にも、既に黄色い菜の花が混じって、寒空の下すつくと立っていた。捨てるのは忍びないと判断した私とNちゃんは、悪戦苦闘しながら、自分たちの花を追加する形で花立てに挿し込んだ。

正月の花に混じり、菜の花にチューリップにカーネーション、それにかすみ草などが咲き乱れた。正月と三月が一緒に来たような、変に賑やかなお墓になってしまった。

天国でSちゃんは笑っていただろうか。呆れていただろうか。

## 音楽の歎び

「音」の連衆のひとり、高野五韻さんが最近みずから制作した、ホーメイを主とするアルバムを送ってきてくれた。ホーメイは地域によってホーミーともいい、以前から知っていた、かの倍音音楽とも言うべき音楽のことを、私はそのホーミーという名で認識していたものだ。

しかし実際、こういう形でまとめて聴いてみると（本当は生で聴きたかったが）、聴く前はあまり考えてもいなかったその豊饒な迫力に圧倒された。五韻さんは自分はまだまだと謙遜し、また事実もつとすごいホーメイの使い手（？）も日本の巷には居るらしいけれど、それでも剥き出しの實在に出会ったときのみ感覚されるような、新鮮な現実の切断面がそこにはあった。

ホーメイはまず腹の底から唸る声というのがあって、その基層の上に金色に燦めく倍音が出現する、というようなもののだが、腹の底からの声とは非常にわれわれの耳になじみのあるだみ声、ある年代から先は広沢虎造の浪花節のようなしやがれ声、と言ったら通りがよいのではないかと思う。そしてその上に現出する金色に燦めく声は、唸っている本人ではない、なにものかの、どこかはるか彼方からの到来を思わせて、聴いていながらほとんどナルシステイックな状態に陥っているみずからというものを発見する。

この状態は五韻さんも報告していて、実際聴いてみて彼のその形容が、昨今はやりの言葉で申せばポエティック・ライセンスめいた「詩的な」表現というのではない、きわめて正確で犀利な記述であることを、私は改めて確認した。もつとも私と違い、五韻さんはまさに「唄っている」当人であり、そのパフォーマンスのただなかに体感された感想である

のだが。

これも五韻さんは同じような感想を書いていたが、ホーメイを聴いていてその倍音が出現し、持続している間は、雲海の雲の間に無数無限のきらびやかな菩薩が涌出顕形するさまを思わせる。いわば圧倒的な世界の出現を見るのだ。この印象の出どころをよくよく探ってみるに、それは基層を成すだみ声が僧の読経する声（群）と非常によく似ているからではないか、ということに思い至った。その厳めしさ、荘嚴の感じから、最初は声明（しようみよう）のことを思ったが、もつと身近なものと考えて、声明のものを成す読経む声、という古来からの日本の生活文化にはなじみ深いものに、より近い感覚なのではないかと勘づいた。

読経む声というのは、日本文学などでは、昔から歌や物語の印象的で重要な箇所や、俳諧の発句や付け句などでわれわれには親しい。当然能楽の詞章や常磐津や長唄の歌詞、（おそらく）工芸美術のモチーフとしても、生き長らえて深く浸透しているものだ。

その読経によく似た低音のだみ声の上を、まばゆい魚鱗のように最高音的な倍音が跳梁し痙攣し、戦慄すべきパルスとなってアルタイの空の深いところで伸びちぢみするのを目撃するがごとき体験を、ホーメイはわれわれに与えてくれる。

ホーメイを聴いてなにかしらなつかしいものを感じたのは、たんにその東洋的な五音階に近接したメロディラインのみならず、このだみ声というものが、十九世紀に発達の極に達したかと想像できる西洋近代音楽ではまず考えられない、このだみ声への執着に、われわれの、特に幼時に接した父祖の匂いを嗅いだからに相違ない（西欧の音楽に、一般的に

濁った低音が存在しないと云っているのではない。

謡や狂言の発声などもそれに入ると思うが、日本の古来からの声楽に見られる、必ずしもだみ声とは限らないけれど、声帯にある種の緊張が惹起され、かたちを改めて発声された声というものは、たとい澄んだ高音でも、だみ声と共有する「通路」を通って空中に消えてゆく。この微妙な通路にわれわれは耳ざとくもなじみのある（日本もそれに含まれるところの）アジアを聴きつけるのだ。

だみ声は先ほども述べた浪花節をはじめ、講談・講釈師、演歌師、香具師、平曲をかたる盲僧や説経語り、また、浪花節うたいと同じく一度は喉をつぶして血を流すという文楽の太夫はもちろん、八百屋・魚屋の呼び込みの声や、パチンコ屋の店内放送、電車車掌の車内放送の声にまでその継承が認められるのではないかと思う。私は個人的には、はるか古代からの唱道文芸や放浪芸にこれらの淵源が存在すると考えている。これは日本列島という地域に限られた話ではなく、東北あるいは東アジアというスケールで思い見るべき問題なのだ。

ホーメイのその倍音部ばかりではなく、じつはこのだみ声を発するという動作そのものから、「他界」は立ち上がっていると見たほうがよい。これをいいかえれば、あらゆる演芸的なもの、芸能的なもののひとつ特徴的な「濁り」の要素、近代的な観点から眺めて、そこに必ずからまる「下司っばい」あくの強さともいいうるものは、ただの身体の動きが舞踏に移行するときのような、それ自体なものかの立ち上がりの前兆というべきであり、ほんとうは無形の弾機のように作用して、ヒトという存在をホーメイの倍音部のごとき天上的な領域に繋げているのだと思う。ここにひとつの秘密の機制がはたらいているのだ、現世的な眼からは世界の真裏のような場所に、絶対的に隔離されているところの。

昔のひとはだみ声による読経のひまひまに、たしかに阿弥陀仏や聖衆の顕現を見たに相違

ない。心の目で見たと言っても生理的に視認したと言っても、それは同じことだと私は考える。ホーメイが感動的なのは、そういう事実、現象には「源流」があるということ、知識としてでなく（いや、仏教的な意味で使われるところの知識として）、神経生理的に体感させてくれるからなのだ。

今回の五韻さんのアルバムに話を戻せば、あんまりきつちりと作り込まれていないことに好感を持った。三線のへなちよこ感や、ホーメイでも高度な技術に属すると思われる「スグット」を用いた『500マイル』などの力の抜けようは、ある意味、草書による走り書きのようなおもむきのライブ感があって、これは具体的なある時、ある場所、ある生きたヒトによってたしかに唄われたものだ、という、動いているものの動きをそのものとして定着させた感覚がより強い。

じつさい、『500マイル』など、ホーメイと合わさって歌謡として思わず聴き込んでしまったが、忌野清志郎の詞「おさえて、おさえて、おさえて、おさえて、悲しくなるのを、おさえて」というところで、80年代ごろの東京や地方都市の、ガソリンスタンド、廃車置き場、ブルースの流れる落書きだらけのバーやいろんなことの幻像が、倍音に似てそれこそ無数の輝く如来のように湧き起こってきて、なんだかたまらない気持ちになった。まあ本筋とは関係ないが。

## 少女

夏休みに帰省した。

大学は封鎖が解除されたばかりで、例年よりずっと短く設定された夏休みのあとに、授業が再開される予定になっていた。

翌日、遅い時間に起き出して、裏山に行ってみた。

大きな櫓の木のところで、そのままつすが山へ登る道と、川沿いの草はらに降りて行く道に分かれている。左に折れる赤土の道は櫓の木に覆われていて、真夏の昼間でもひんやりとした日陰の坂道になっている。そこは、少年だったわたしの遊びの入り口だった。

崖のところどころから水がしみ出している。濡った坂を、だらだらと下って行く。その道でもぐらの死体やセミの抜け殻を見つけた少年のわたしが、残像のようにわたしの足取りに重なる。坂道を降りきると視界が開けて、山すその畑や、草はらや、木々の梢が、眩しく目に飛び込んでくる。道は、草はらの中でふたつに分かれ、草はらが終わるところでまた合流して、ずっと奥の一軒の農家へ続いている。

少女がふたり、草はらで遊んでいる。ついでこのあいだまで、少年だったわたしが遊んでいた草はらで。

草の中にしゃがみ込んで頭だけ覗かせている少女が、顔を上げて振り向き、手を伸ばした。立っている少女が、その手に顔を近づけて覗き込んでいる。

ふたりの話し声が聞こえる。ひとりの声は低く落ち着いていて、もうひとりの声は、草はらの黄色い花のように弾んでいる。少女たちの姿はまだ遠いのに、目の前で囁かれている内緒話のように、ふたりの声がわたしの耳に聞こえてくる。じりじりと照らしつける真夏の陽射しは、遠くまで音を伝えやすいのだ

ろうか。それとも、少女たちの声には、遠くへ届く不思議な性質があるのだろうか。

草はらは、少年だったわたしの遊びの終点だった。クワガタが群がる柳の木が数本生えていて、川岸に近い雑木林に分け入ると、豊作の年には、山ぶどうの蔓がたくさんの甘酸っぱい実をつけた。夏の終わりの夕暮れに、草の中に佇んで、真っ暗になるまでカンタンの鳴き声を聞いていたこともあった。

しゃがんでいる少女が、わたしに気づいて眩しそうに眉をひそめた。立っている少女が振り返った。わたしはふたりのところへ歩いて行った。

「なにをしてるの？」

しゃがんでいる少女の指にはさまれている、緑色のバッタに目をやりながら、わたしは声をかけた。

「虫を捕まえてるの？」

少女はなにも言わず、暗い顔をして下を向いてしまった。

「なんていうバッタ？」

立っている少女が、

「キリギリスだよ」と、代わりに答えた。柔らかない、落ち着いた声だった。その声に聞き覚えがある。ふとそんな気がして、わたしは少女を見つめた。

額や鼻のまわりにうつつすらと汗が浮かんでいたが、少女の目は眩しさを少しも感じていないみたいだ、平然とわたしを見つめ返している。

少女は、両手で包み込むようにして、しゃがんでいる少女の手からバッタをつかみとった。それはキリギリスではなくて、ミヤマフキバッタという名前だった。

「怖くないの？」とわたしは訊いた。

「こわくないよ」立っている少女が答えた。

「おじちゃん、こわいの？」  
「うん。少しね」

少女の表情が囁いたように見えた。それから、自分でその鬚を払うように、口元に笑みをにじませた。もしかしたらわたしはなにか、複雑なことを言ったかも知れない。少女にというより、わたし自身に。

「平気だよ。こわくないよ」

少女は片手に持ち直したバツタを、わたしに向かって差し出した。首をかしげ、肩のあたりをこわばらせているのは、わたしを怖がらせないように気をつかっているのかも知れなかった。

バツタは右に左に頭を動かして、少女の手から逃れようとあがいている。鋭い口を開けて、指に齧りつこうとする。後脚が棒のように伸び切っているのは、胴体をきつくはさまれているせいだろう。

わたしが少女の手からバツタを受け取ったら、逃がしてしまいそうな気がする。逃がしてはいけないのだと思う。少年のわたしだったら、そんなヘマはしない。少女よりも巧みにつかむことができるだろうし、なによりももつと自然に動くことができるだろう。わたしは人差し指を伸ばしてバツタの頭に触れ、そして、ゆっくりと指を離した。

「ほんとだ。大丈夫だ」

バツタの頭の感触は点のように小さくて、少女の指の熱さが、わたしの指に溢れそうなほど残された。

少女がうれしそうに微笑んだ。草はらにしゃがみ込んだままの少女が、わたしたちのやりとりを不満そうに眺めている。

その先へは行かずに、わたしは道を引き返すことにした。後ずさるように少女たちから離れ、「ありがとう」と小さな声で言っただけ、ふたりに手を振った。しゃがんでいる少女はわたしに顔を向けてすぐに目をそらし、立っている少女はわたしをまっすぐ見つめて、ぎこちなく手を振り返した。ふたりの姿が遠くになって、声も届かなくなると、草はらはもともと少女たちの遊び場だったように思えてきた。

数日後、暗くなってから、自転車に乗って外に出た。とくにあてはなかったが、町に一軒しかない本屋を覗いてみるつもりだった。大学のある街でも他の街でも、本屋を見ると入りたくなる習性が出ていた。

大学をやめようとわたしは決めていた。その先のことは何も頭になかった。東京へ出なければならぬという、そうしたいとも、そうする必要があるとも信じていない不安な気持ちのほかには。

ナトリウム灯が明るく照らしている、コンクリートの小さな橋を渡った。手をつないだ、母親と娘らしいふたり連れを追い抜いた。

「あつ、おじちゃんだ！」

「誰？ おじちゃんて誰よ！」母親の鋭い声が、少女の声を追いかけるように聞こえた。

わたしは振り返った。

草はらの少女だった。ばたばたと二三歩走って、母親の声で足を止めたらしい少女の、呆然とした姿がわたしの目に入った。

あの少女だとすぐに気づいたが、わたしはそのまま自転車走らせた。声をかけてあげようとも、手を振ってあげようとも思わなかった。

少女を振り返ったわたしの眼は、刺すように冷たかったと思う。だから少女は戸惑って、棒のように立ち尽くしたのだ。

日陰の小道を歩いて、眩しい草はらで少女たちに触れた時間を、いつのまにかわたしは、夢の世界のように記憶していたのかも知れない。

## confidence

ペットショップにハムスターを買いに行ったのに、大好きの店長の陰謀で何故か店内で子犬を抱かされていた。私は犬を抱いたことなどなかったのだから緊張していたが、視線を落とすと、犬も固まって白目をむいていた。結局、店長が犬しか売ってくれそうにないので、別の日に直すことにした。(後藤)

作品を書くこうとして、ずいぶん迷走している。これからも迷走の日々は、わが時間の限り、果てしなく続きそうだ。(木村)

まずは、この「tag」への拙詩の寄稿を快く許してください。倉田さんをはじめ連衆の方々へ謝辞を。

先日、仕事の打ち上げで得月楼へ。宮尾登美子の小説『陽暉楼』の舞台、明治三年創業。建物もさることながら大広間にずらっとならんだ秘蔵の盆梅にため息。(近藤)

四月より、転勤に伴い活動の拠点が関東に移ります。現在、引越の準備などで大忙しの日々を送っています。

京都には五年間住みました。京都を離れるにあたり、ようやく素直に「私は京都が好きだ」と思うようになりました。他所者の私は、この街のプライドの高さがしばしば鼻につけていたのですが、今はその確執(?)も取れて素直に寂しいです。数年後には京都に戻ってくる予定です。その時この街が自分の目にどのような映るのか、楽しみにです。(鈴川)

近況というよりはちょっと前の話だが、話題になったねじめ正一の『荒地の恋』を

読んだ。家庭を捨てて亡くなるまでの20年弱の北村太郎を描いた小説である。家出のきっかけが、少年時代から付き合いのある田村隆一の夫人(当時)、和子さんとの不倫であることは、知っていた。北村太郎の自叙伝である『センチメンタル・ジャーニー』も出てすぐに読んでいたし、北村太郎が亡くなった前後に北村太郎関連の記事に注目していれば誰でも知っていたことだ。たはずだ(実を言うと、七〇年代末にはすでにその噂を聞いていた。世の中には、口の軽い人がたくさんいるものである)。

そういうこともあって、大して期待して読み始めたわけではなかったのだが、このきっかけであった田村隆一夫人以外に、若い恋人が後にできていたことを知り、見てきたようなラブシーンまで描き込まれていたもので、びっくりしてしまった。自分もしたいというわけでは間違ってもないが、そんな甲斐性はオレにはないなあという敗北感というか嫉妬というかを感じてしまったのである。その後ではたと気づいた。今まで何でそちらの話は知らなかったのだろうか。

それを知るために、さらに何冊か本を読んだ。一九八五年に書かれながら、まったく北村太郎の影がなく、田村隆一夫人という立場を堅持して書かれている本も読んだし、一度読んだきり、ほこりをかぶっていた『センチメンタル・ジャーニー』も読んだ。センチメンタル・ジャーニーには、A子さんという、最初のきっかけの女性のことと書いてあったが、A子さんの夫が田村隆一であることは書かれていなかったし、まして若い恋人のことは書かれていなかった。

九〇年代後半頃だったと思うが、北村太郎のアクロステイック詩という話題があった。北村太郎のある時期の作品の各行の一字を斜めにたどっていくと、たとえば「アツコライツマデモダイテイタイボクノカワイイヒトヨ」というような恋人へのメッセージが現われてくるというのである。『センチメンタル・ジャーニー』で本人が暗号の詩を書いたとヒントを出しているの、それをやってみた人がいた。宮野一世さんが発見されたことが有名だが、それとは別個に桐田真輔さんも見つけている。桐田さんがそのことについて当時書かれてたWebページ (<http://www.linkclub.or.jp/~kiru/rog.html>) なども読み返した。

結論を言うと、ヒントというか答はこのアクロステイック詩にあった。しかし、答が入っていたことは、二〇〇四年に刊行された『北村太郎を探して』を読み返すまではわからなかったのである。この本に、二〇〇一年の「北村太郎の会」における宮野一世さんの講演が入っている。アクロステイック詩についての解説である。その後、質疑応答があつて、正津勉さんが「このあつこさんというの、誰ですか？」と質問したのに対し、宮野さんは和子さんだと思つたと返答した。ところが、その場で榎木融理子さん（北村太郎の娘さん）が「違ふと思ふ」と言い、柳下和久さんも「若い恋人」のことを本人からきいたと言っている。そういうことが、ちゃんと活字になつていたのである。

要するに、カズコとアツコの違いを見逃していたということだ。わかつてみれば、あつけないことだが、固有名詞を交換可能な符号のように思っていた自分の浅はかさを思い知らされて、さらにめげた。

それにしても、答を見つけるまでのこの（無駄な）エネルギーは一体なんだったのだろうか。（長尾）

「直観音楽」というのをやっているグループに参加する機会を得た。それは、シュトックハウゼンが書いた詩のような指示のみに従つて、グループで音を出すというものだ。それは謎めいた指示ではあるのだが、その実践を試みると、音についての感じ方、考え方は確かに変わってしまった。これについて書き始めると長くなってしまうのだが、シュトックハウゼン自身のこの言葉が、その経験を最も雄弁に語っていると思う。

「正しい持続を感得しようとすれば、人は自動的に音のあらゆる性質（音高、音色、強度、順序や音群や音塊における位置）を考慮に入れるものです。そしてもし機械的で音楽外的な音の操作から自由になるならば、この録音のように、有機的で、解き放たれた時間が生起するのです。音が時間の中に存在するのではない。むしろ時間が音の中に存在するのです。」

時間変数によつて記述されるものではなく、まさにそこに「在る」ものとして経験されるのだ。過ぎ去つてしまうメロディではなく、「今ここに在る」ものとして、手で触れてテクスチャを感じ取れるモノとしての音。

これは、詩人がいつも言葉に移し替えようとしている、「謎」だとか「彼岸的なもの」のあらわれ」といったものに、とてもよく似ているように思われるのだ。

僕に詩が訪れにくくなったのは、そういう「在るもの」への経路を、詩以外に持つてしまったからなのかも知れない。（高野）

ある病院のデイケアに通っています。そこで習字の時間があるのだけれど退屈でした。こないだひさしぶりに行ったら、お手本の書物があたらしくなっていました。中に『声に出して読む日本の詩歌』という本や源氏物語をダイジェストして大きな字で原文と

解釈が載っている写経の本があった。

ほんとに声に出していると職員に聞こえてしまい「空耳かと思いました」と云われた。ポピュラーなものがほとんど。特に和歌がしみじみした。釈迦空や茂吉は群を抜いている気もした。たとえば釈迦空の、山を行く時に花のふみ跡が新しい、誰かが通ったばかりかというような素朴な歌の内容でも誰かに対する知りえないドキドキや絆さえ見えるようなのだ。載っていた三首はどれも旅や道について。そこを通った誰か・死者や馬に限りなく思いをいたす。そういう思いの時間にはドキドキするほう。小林秀雄に折口信夫（＝釈迦空）は云ったのだ。「本居宣長なら源氏物語論が一番よい」と。さわりながら源氏物語の文の心映えの細やかさ・精密さ・ひろがりを感じた。日本人がすばらしいとかなんとかよりも、ここまで「感じさせる」文っていうのは驚いた。古文の時間だとさっぱりだったのに。

(石川)

さいきん、CDを売る店の売れ行きがだんだん落ちてきて、経営がそのうちたちゆかなくなるところが増えそうだという話だ。mp3等、ネット配信に因るところが大きいようだ。でも、少し考えたら、二十年前くらい前にレコードに対してCDがやってきたことのまた繰り返しという気がしないでもない。そもそもレコードが登場してきたときも、既存のものに対する種の侵襲はおこなわれたはずで、ただ時を追うにしたがって、どんどん不可逆的に、元に戻れない形になっているとはあるだろう。でも「元に戻れない」のは複製の世界でだけ、という限定は存在するのだ。概ね複製されているのは、たとえそれが電子音に近いものであれ、「現実の音」にはかならない。いいかえれば、複製とはライブの複製なのだ。電子音を使用したもので

あっても、このライブと複製とはあくまで異なる象限にあるということは忘れられてはならない。たとえば現実の楽器の音に混ぜて、サンプリングした音を機械から流すようなことがあっても、それはあくまでもライブにほかならず、臨場感ではなくってそこにわれわれは臨場しているのだ。つまり現場としてのライブと複製の世界とではディメンションが異なるのだ。この事実が人が世界と具体性で結ばれていることの基準点を示すのであって、この具体性という場所に、人はいつでも立ち返れなくてはおかしいことになってしまうと思う。(倉田)

今回は、マーラーでびっくりした。

毎度ながらN響アワーねたになるが、いっつぞやあとがきでふれたベルクのコルチェルトを別の演奏でまた聴いた。最初の一音からして無人称を感じさせる、いいかえれば動詞だけがそこに在るような演奏でない、どうも気持ちが悪い。

当夜も、しかし収穫があつて、天使マンちゃん猫を抱いた写真。それと、愕然となったのは、その母親アルマ・マーラーの死んだ年、自分は小学校四年だったと判明したこと。

そんなについ最近の事で、ほんとにいいんでしようか!

Of t d e n k i c h s i e s i n d n u r a u s g e g a n g e n は、グスタフ・マーラー「亡き子をしのぶ歌」から、子供たちは外に出かけただけなのだ。

(和田)

このところ、自分の部屋で寝ていません。では、どこで寝ているのでしょうか? 実は、駅前の電腦喫茶で夜を過ごしているのです。

はじめのうちは、「職場へ出るための、寝坊防止対策」として、電腦喫茶を利用し

ていました。自分の部屋はあまりにも居心地が良すぎて、どうしても二度寝をしてしまうから、と。ところが、時間が経つにつれ、冷暖房完備、様々なジュース飲み放題、まんが読み放題、食事の持ち込みOK、そしてなによりも、インターネットが使い放題という電腦喫茶環境にすっかり嵌ってしまい、電腦喫茶での夜の生活の虜になってしまいました。いわば、電腦喫茶廃人の誕生、といった次第です。

いや、電腦喫茶の楽しいことと言ったら！ 本来なら、詩集や詩論書を読み耽るつもりが、ついつい Eiki を覗いたり、GPII をチェックしたりと、ただもうひたすらに気ままな夜が更けていきます。

いつも背負っている MacBook Pro も、いまや詩稿の清書と蓄積とに使うのみ。プロバイダからのメールチェックも、ここ2ヶ月ほどしていません。さすがにまだしたことはありませんが、コンピュータからの印刷も出来るので、そのうち、清書した詩稿も、電腦喫茶で出力するようになるかもしれません。

電腦喫茶というと、タバコの煙が立ちこめた、オタクの溜まり場、というイメージを持たれる方がおられるかもしれませんが。ところが、(僕の御用達だけかも知れませんが) 実際にはそのような怪しい場所ではなく、若い女性が利用していることも時折あるのです。

このように、電腦喫茶は、(僕だけがそう感じているだけかも知れませんが) とても快適な隠れ里です。みなさまも、どうかお試しあれ！ (野村)